

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

Title	生成文法の迷妄・認知文法の混迷・そして救いは？
Author(s)	田原, 薫
Citation	ニダバ , 27 : 145 - 148
Issue Date	1998-03-31
DOI	
Self DOI	
URL	http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00048038
Right	
Relation	



生成文法の迷妄・認知文法の混迷・ そして救いは？

田 原 薫

0. はじめに：

本研究ノートは、最近顕著になった生成文法の衰退と、（特に Langacker 流の）認知文法の隆盛を見る一方で、両者の間の反目や、相手陣営に対する軽蔑、また方法論と関心のもち所の違いによる不毛な「論争」などを実際に見聞して、密かに、しかも大いに憂えるところがあり、その対立を止揚するために、あるべき、或いはもつべき言語観・文法観を提案する試みであるが、現状では黙示録的(apocalyptically)に語らざるを得ない。

1997年11月8日・9日に京都大学で第22回関西言語学会が開催されたが、そこでなされた研究発表の多くが何らかの形で認知言語学或いは意味論に関係したものであり、チョムスキーの流れを汲む生成文法の枠組による研究発表は全体の5分の1あるかなしの低調なものであった。また2日目のシンポジウムは題目が「認知言語学のパラダイムー新しい言語科学の潮流ー」であり、パネリストとして新進気鋭の認知言語学者、大堀壽夫・中村芳久・坪井栄治郎【敬称略。以下同様】がそれぞれ専門の研究領域の興味深い問題について講演した。3年前の第19回関西言語学会では認知言語学の枠組による発表はまだ少なく、シンポジウムの題目も「言語習得と言語理論：日本語の格と句構造を中心に」であり、コメンテーター（大津由紀夫）、パネリスト（西垣内泰介・伊藤友彦・高橋真理）ともども生成文法の枠組で研究している人であり、発表もその線に沿ったものであったことと比較すると、わずか3年の間の勢力分野の（劇的な？）交替は、感慨なきを得ない。

一方、月刊『言語』（大修館書店）1997年5月号～8月号にかけて《往復書簡：生成理論と認知言語学の接点を求めて》という特集が組まれ、生成側の中島平三、認知側の西村義樹が、中島→西村→中島→西村の順序で結局最後まで噛み合わなかった「論争」を展開した。もともと anti-Chomskyan である私は、読後感としてはどちらかと言えば西村の方に共感的であったが、Langacker（以下「ラネカー」）流の認知文法の言説を野放しにしておくことも、やがてその教義の「密教化」を招来し、言語学徒の知性の荒廃をもたらすのではないかと、と何となく心配になってきた。現状ではまったくお先真っ暗である。

そこで、本ノートは、生成文法の現実の行詰りと、認知文法の可能性上の行詰りの理由を究明し、それを克服する道があるとすればどんな道なのか示唆を試みるものである。

1. 生成文法はなぜ行き詰まったか

ここで生成文法というのは色々な流派を含む広義のそれではなく、チョムスキーの流れを汲む変形生成文法を指しているが、そのここ10年ぐらいの理論発展史は、The MIT Press から出された Chomsky(1995) *The Minimalist Program* にうまく集約されている。当今のチョム追求者たちの間に人気が高く、斬新さを誇示するためのいわゆる「代名詞」のようにになっているミニ（マリスト）プロ（グラム）は、同著の第3章を占めているが、実はそれは最新の枠組ではなく、同著の第4章 'Categories and Transformations' によって超克されていて、発展的解消を遂げたものとして扱われるべきものである。しかし新しく書き下ろされた第4章のC & T理論は過激で曖昧な点が多く、生成文法家が援用／引用して利用できるようなものでないため、今までのところ利用されているのは主にミニプロの枠組である。

さて、それほどまでに猫の目のように変転したチョムスキーの理論枠組であるが、彼が新時代の言語学の旗手として登場した1957年の *Syntactic Structures* 以来、まったく変えていないことが一つある。それは、最初の文分析文法思想から最近の文構築文法思想に転換したにも拘らず、一貫して《主語と目的語の関係、或いは主語候補と目的語候補の関係は、必ず前者が後者をc統御するような関係》でなければならない、という固い妄想である。なるほど、文分析文法の時代なら、文主語はまず文の残余すなわち述部と最初に枝分かれするのであるから、述部すべてを、従って目的語や定形動詞をc統御している。そこで偏執的に凝固した主語特別地位観が、実に40年間も、しかもbottom-up 式の文構築文法の時代になっても、チョムスキーの頭脳に取り憑いて、一向に去ろうとしないのである。そして彼は、他動詞（V或いはVb）と目的語（候補）とが最も早く結合してV' という集合を作る（と彼が考える）のは、目的語の（受動的） θ 役割がそこで、且つそこだけで決まるからであるとしている。なんという愚かな妄想であろうか。

彼はその妄想を正当化すべく、C & T理論の中で次のような説明を与えている。すなわち彼は他動詞を〔Vが目的語と結合してできるVPの上に「軽動詞」 v を掛けて v の投射を作り、その後で〕Vを v に移動編入して作られた複合動詞Vbである、と考える。図1

図1

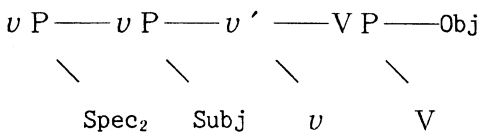
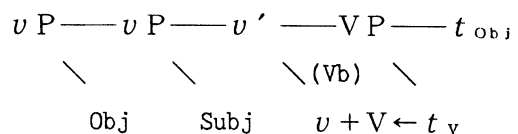


図2



この構想で、Vは受動的な自動詞で・ v は factitiveな意味をもつ無音の動詞であると言われている。図1から図2への過程でVが v に編入されるが、Vはguest で v がhostであるから、 v' 以後の投射の意味は、 v のもつ意味を活かした他動詞的なものになる。またその編入に伴って目的語Obj が主語候補Subjを跨いでSpec₂ の位置に移動する。Subjは

やがて主語になるために上昇移動しなければならないから、あの忌わしい交差移動通路が生じるわけである [the paradox of Case theory!]。

さて、確かに以上のように理論デザインすれば、Obj は受動的な自動詞の唯一項であるから受動的な θ 役割をもつのは当然で、他動詞の起源をこのように説明する限りにおいてその理屈は正しい。しかしこれが唯一考え得るメカニズムだろうか。実は、彼は C & T 理論において 'bare phrase structure system' というのを提唱している。それは投射の階層ということを考えないシステムである。それによれば図 1・図 2 で VP は V、 v' も v P も v と書き替えられることになるから、V と v が合併された場合、どちらの投射になるかは一義的には決まらないことになる。従って、上記の合併の場合、host と guest の区別は消滅するから、たとえば v を V より先に構築過程に導入した句構造も可能である。図 4

$$\begin{array}{ccccccc}
 v^{\max} & \xrightarrow{\quad} & v^{(3)} & \xrightarrow{\quad} & v^{(2)} & \xrightarrow{\quad} & v^{(1)} \text{---Subj} \\
 \diagdown & & \diagdown & & \diagdown & & \diagdown \\
 \text{Spec}_2 & & \text{Obj} & \xrightarrow{\quad} & V & & v^{(0)}
 \end{array}
 \qquad
 \begin{array}{ccccccc}
 \text{VbP} & \text{---} & \text{Vb}' & \text{---} & \text{Vb}' & \text{---} & v' \text{---} t_{\text{Subj}} \\
 \diagdown & & \diagdown & & \diagdown (\text{Vb}) & & \diagdown \\
 \text{Spec}_2 & & \text{Obj} & \xrightarrow{\quad} & V + v \leftarrow t_v
 \end{array}$$

図3において $v^{(0)}$ が先に出現し、やはり factitive な意味をもつとすれば、その直接項である Subj が他動詞主語にふさわしい能動的 θ 役割を保証されよう。主辞 v の投射はどこまで行っても v であるが、受動的な V に《直近的に古参統御される》Obj は V の影響を受けて受動的な θ 役割を保証される、というふうに理論デザインすれば、主語候補 Subj が目的語 Obj よりも早く、つまりより下位に出現するような句構造が成立し、それは結局図4のような他動詞句の句構造に収束するであろう。

要するに、C & T理論枠組のもとでは、或る項が他動詞と早く／遅く結合するから、と
 いてどちらの項の θ 役割が受動的であるとも能動的であるとも言えないことになる。つ
 まり他動詞句内部の階層構造によって主語候補と目的語候補の地位差が生まれる、とい
 うのはチョムスキーのまったくの妄想であり、単なる教義にすぎない。これを擁護するた
 めに彼があらゆる詭弁を弄したことが、生成文法の信用失墜に繋がったのである。

2. 認知文法はなぜ行き詰まりそうか

チョムスキー派の生成文法がめっきり勢力を落としたのに比べて、ラネカー流の認知文法は今や昇竜の勢いである。この流派は、有意単位の意味（の多義性）に関して「プロトタイプ、プロトタイプからの拡張（metaphor & metonymy による）、それらから抽出された共通項としてのスキーマ」から成るネットワーク・モデルを提起する。それはその限りで或る程度の説得力をもつのであるが、私の見るところ、致命的な問題点が四つあるように思われる。①まず最初は、メトニミーという現象に含める範囲がはつきりせず、無限の拡大解釈を許すような傾向があることである。②次の問題点は、或る認知メカが或る統語

メカの原因として主張される場合、反証可能性がなく、結果論的もしくは循環論的な説明にしかないケースがしばしば見られることである。③次に、生成文法派による攻撃から受けた精神的トラウマが原因かどうか知らないが、まともな統語論がない、またそれを持とうともしないことである。④最後に、③とも関連するが、チョムスキー派の統語論の自律性に反撥するあまり、逆に認知メカの自律性を主張しすぎていないか、という疑問を抱かせることである。私見では統語法から認知へ及ぼす影響・制約も無視できない。

まず①の例として、中島vs西村論争に現れた西村の繰り上げ構文に対する扱いが挙げられよう。That Don will leave the party is likely. というような「もとの文」から、Don is likely to leave the party. という主語繰り上げ文が生成されるという主張は生成文法でおなじみのものであるが、西村流の認知文法では「より注目の対象になりやすい項X (Don)を介して他方の項Y (that Don will leave the party)にアクセスする」メトニミー効果によって be likelyの意味が拡張されたからだ、と説明する。しかし私見では、Don は確かに項であるが、that Don will …全体は情報であり、Don だけを手がかりとしてそんな情報にアクセスすることはできないから、説明はメトニミーの濫用であろう。

次に②であるが、ラネカーは「描写対象としての事態の解釈において中心的な地位を与えられる要素 the trajector」が主語になる、というが、人の脳機能を観測することができない以上、件の要素がほんとに中心的な認知的地位を占めているかどうかは、結果として主語になっているかどうか、で判断するしかないことになり、結局循環論になる。

ついで③を考えよう。認知文法家は丸や四角や矢印などを使って子供向きイラスト（漫画）のような図形を描くが、主語・目的語などの定義を統語構造に基づいて確立しようとしなない。これは怠惰というしか言いようがない。もしラネカーでも西村でも、「行為連鎖 (action chain)」の先頭に来る要素が主語候補になる、と信じているのであれば、行為連鎖を写像するような句構造、たとえば田原流のS O O T h 2のように、意味的に能動性の高い項・述語からその低い項・述語へと順を追って節文構築現場に導入していくような句構造を作っておいて、必要に応じて能動性の高い部分を消して（或いは隠して）、注目された要素が先頭に来るようにして句構造を見ていけばよいから、そういう句構造は必要だと思えるのに、彼らが一向に腰を上げようとしないのは不可解である。

最後に④であるが、私見では、統語法と認知のしかたは対等に制約しあい、助け合っている相互依存・相互作用する車の両輪であって、一方の優先を主張するのは誤りだと思う。統語法が認知の形を制約する例としては、たとえば英語では I was helped by him. という受動文は当たり前であるが、ドイツ語 helfen は与格動詞であるため、ich の形で主語になることはできず、Mir wurde von ihm geholfen. という非人称受動文にしかない。従ってこの文は Ich…を主語とする文と共通主語を省略した等位接続ができないわけであるが、それが認知にも影響を及ぼす。それは英語 help とドイツ語 helfen の統語的特質の偶然の差異がもたらした結果であり、母語話者の認知の差が原因ではないであろう。